

2023年2月5日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「幸い」

聖書：マタイによる福音書5：1～12

イエスは「群衆」(5:1)に向かって八つの「幸い」について語る。その「幸い」は中々受け入れがたい。何故「貧しさ」や「悲しさ」が幸いなのか。ここに集まった群衆はどう受け止めたのか。

この群衆とは「ガリラヤの人々」のことで、ローマ帝国の抑圧と差別の中に置かれ、まさに「貧しさ」や「悲しさ」の只中であつた。イエスは「幸いである、天の国はその人たちのものである」と語られたが、もし語っておしまい…であれば、このイエスの言葉は、たぶん何も意味を持たず、消えて無くなつたのではないかと思う。しかし、このイエスの言葉が今も消えて無くならず、語られているということは、絵空事、絵に描いた餅ではなく本当に「幸いだ！」と感じられたからであろう。

イエスの歩みを見る時、イエスは友無き者の友となり、病があつて誰も一緒に食事などするはずもないと思われた人の家を訪ね、食を共にする。「いちじくの木を呪う」(マルコ 11:12) という話があるが、空腹を覚えられたイエスは、実のなっていないいちじくの木を枯らしてしまう。いちじくの季節ではないにもかかわらず。イエスはこの時、本当に腹が減って、季節など待ってられないほどだったのではないか。それは何もイエスご自身だけがというのではなく、イエスと共に居る人々のことを表していると思われる。イエスは、そのような人々と共に貧しくなり、共にお腹を空かせ、共に悲しみ、共に腹を立てるお方として歩まれた。その貧しさの中に「幸い」が見えてこないか、悲しさの中に「幸い」が見えてこないだろうか。

この「幸い」の言葉の中には、隠れている大事な言葉がある。それは主語となるべき「神」が隠れている。「神によって」という主語が隠れている。「なぜなら」という接続詞を付け加えるともっと分かりやすくなる。「心の貧しい人々は、幸いである、<なぜなら、神によって>天の国はその人たちのものである。・・・」

私たちの人生の歩みの中にも、主語となるべき「神」が隠れている。私たちの歩みの中には、辛く、不幸と思える、貧しく、悲しい出来事はある。しかし神が、いつも共にあつたことを覚える時、それは慰めとなり、励ましとなり、幸いとなるのではないか。

もう一つ。あなたは「幸いな人々」の歩みをしているか。あなたは「義に飢え渴いている」か。あなたは「憐れみ深い」か。あなたは「心は清い」か。あなたは「平和を実現する人々」と共にあるものか。私たちの目には見えない、神はいつも共にあることを覚え、私たちも「幸いな人々」の一人として歩ませて頂きたい。(神谷)